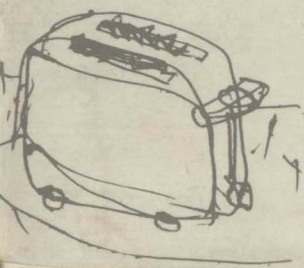


午後の旅立ち



yamada taichi

山田太一

作品集

5



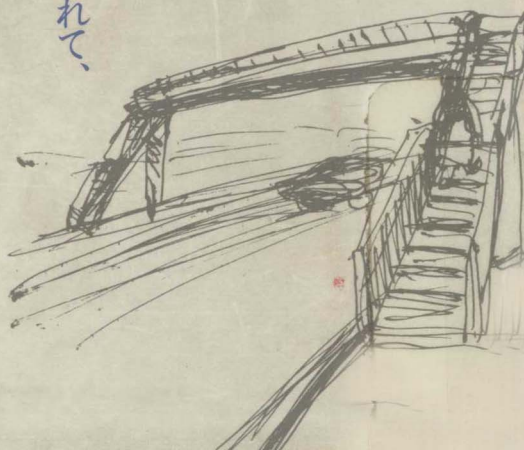
「一年でいい。別れて、暮さないか？」

夫が起した航空機事故が平穏な家庭に危機をもたらす。

不幸の影のなかで

新しい生き方を模索する

家族たちの冒険。



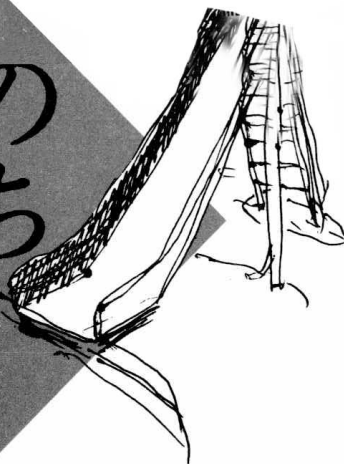
yamada taichi

午後の 旅立ち

山田太一

作品集

5



大和書房

山田太一作品集—5

午後の旅立ち

1985年10月20日 第一刷発行

著者——山田太一

発行者——大和岩雄

発行所——大和書房

東京都文京区関口1—33—4 〒112

電話番号(203)4511

振替 東京6—64227

印刷所——信毎書籍印刷

製本所——ナショナル製本

装幀——菊地信義

装画——田中靖夫

©1985 Taichi Yamada Printed in Japan

ISBN4-479-55005-4

落丁本・乱丁本はお取替します

山田太一作品集 5

●走る大型トラック（夜）

その禍々しい正面。厚く太いタイヤ。

「爆発物」のプレート。

首都高速七号線。

佐原誠の声「三年前の十月十八日、首都高速七号線、小松川ランプ近くで、アセトンを積んだトラックの運転手が、心臓発作を起して側面の壁に激突した。忽ち炎上し、追突した車二十四台に及ぶ大事故であった」

●トラック・車内

運転手、胸の激痛にのけぞる。

●激突炎上するトラック

短く激しいモニタージュで、炎上を見せる。轟音の中

3——午後の旅立ち

で意味不明な、怒声、悲鳴が聞えて。
医師の声「道あけて、道！」

●病院・廊下

医師「（白衣に血がつき、殺氣立って、カメラマンたちを廊下の脇へ両手で押しやるようにしながら）邪魔になるのが分らないのかッ！ どいてどいて！」

血だらけの怪我人をのせた移動用のベッドが三台ほど、急ぎつきあたりの病室へ向ってはこぼれて行く。それを小悪魔のように、カメラマンたちが、つきまとして、フラッシュをたく。

「ここまで、カメラはここまで！」

「さがって、さがって！」

と病室の手前で、二人の医師が進んで行くベッドの両側で、カメラマンをくいとめる。手術室のドアがかけられ、移動用ベッドは止めることなく中へ。それと一緒に、カメラマンの河上が身をかがめて中へ。

若い医師「（気がついて）おい、君！ ちょっと！」

●手術室

河上「（フラッシュを二度ほど急ぎたく）」

医師「なにをする、君は！」

看護婦「出て行つて下さい！」

●病院の階段

河上「(かけ上つて行く)」

佐原誠「(追いかけて) 河上さん」

河上「なんだ！」

誠「(追いつき) よしましろう(腕をつかみ) これ以上撮ることはないですよ」

河上「バカヤロウ(と、つきとばし) それでも手前、記者か！」

●病院・廊下

看護婦「(指さして走るように来ながら) なんですか、あなた。駄目ですよ！」

河上「(タックルをのがれるようにかわして、あいているドアの病室へ急ぎ、フラッシュをたく)」

●その病室

ベッドと移動用ベッドに怪我人が、ところせましとして、看護婦と医師が忙し気に手当をしていて、看護婦が慌てて、

看護婦「よして！ やめてやめて！」

その間もフラッシュたかれる。その河上の腕を激しく

ひっぱって一方へ行く誠。

河上「おい——貴様！」

誠「(河上を壁に押しつけ) よそう。河上さん、よそう！(といいながら、頭を下げる)」

●病院脇の路上

殴られる誠。河上、さらに蹴とばす。

河上「(押しまくって) 貴様、それでも取材記者かよ！組んでるキメラマンの邪魔して、取材記者といえるかよッ！」

誠「(抵抗せず押しまくられて) すみません(と一礼)」
バラバラと一方へ走るキメラマンたち。

河上「(思わずその方を見て) いいか。ついて来るなッ！貴様なんか、消えちまえッ！(と気が気でなく、走り去る)」

救急車の音や、怒声など終始。

●週刊誌編集室(昼)

編集記者栗山良介(35)、立ったまま原稿に朱を入れていて、すぐその原稿持って出口の方へ行きながら、出口近い机の女性の前に原稿を置き、

栗山「(ほうり投げて、忙し気にいい捨てるという風ではなく、極めて普通に) 三時に竹西さん来るから、渡し

て」

女性「はい」

栗山「(しかし動きは早く、もう廊下へ出ている)」

●廊下

栗山、一方へ。誠、廊下で待っていて、すぐその栗山に続く。栗山、狭い応接室のドアをあけて入って行く。

●応接室

栗山「(椅子に腰をかけながら、煙草を出している)」

誠「(入ってドアを閉める)」

栗山「聞いたよ」

誠「すみません(と一礼)」

栗山「(腰掛けろという仕草をチラとしつつ不機嫌に)いいふらしてるぞ、河さん(と煙草に火をつける)」

誠「(うなずいて椅子へ腰掛ける)」

栗山「(遺憾でならず)何年やってんだよ」

誠「(一礼)」

栗山「フリーの取材記者が、組んだカメラマンの邪魔したなんて評判だったら、使い手はないよ」

誠「(一礼)」

栗山「そりゃあ、ああいう事故にあんたやったのは、俺も

悪い」

誠「いえ」

栗山「たまたまあんた来てたし、他に誰もいねえし、あんただって素人じゃねえんだ」

誠「(一礼)」

栗山「いってみりゃあ、チャンスだよ」

誠「(一礼)」

栗山「そういうの、物にしねえで、どうすんだよ」

誠「(一礼)」

栗山「なにやらしても押しが足らなくて、この頃は、各社のボーナス調べとか、冬休み日数比べとか、そんなことしか、あんたには頼めねえじゃねえか」

誠「(一礼)」

栗山「河さんじゃないけど、本気で俺も仕事、かえた方がいいんじゃないかと思うね」

誠「——(動かない)」

栗山「河さん、編集部でカーカーしゃべっちゃったから、みんな知ってるんだ」

誠「(うなずく)」

栗山「うちの社は、あんたに頼むわけにはいかなかった」

誠「——(青ざめる)」

栗山「ゆうべのは、五十枚分、銀行に振込むよ。ご苦労さ

ん（と立上る）」

誠「栗山さん（と立上る）」

栗山「（目をそらして立止る）」

誠「押しが足りないっていわれますけど、事故で死んだ人の遺族に、いま悲しいかって聞くのが、押すことでしょうか？」

栗山「——」

誠「新婚のタレントに向って、いま嬉しいかって聞くのが押すことですか？」

栗山「そうだよ。どんな返事が出るか分んねえじゃねえか。それ聞けないのは、あんたの欠点だよ（と出ていってしまふ）」

●駿河台あたり

誠、雑踏を歩いて行く。

誠の声「その時はまだ、矢島さん一家をぼくは知らなかった。この町から、電車を乗り継いで、一時間余りもかかる」

●青葉台駅前

誠の声「郊外の住宅地に矢島さんの家はあった」

●住宅地の道

新しい家が多い。

ハイヤーが通って行く。

●矢島家・ダイニングキッチン

昼食の食器を洗っている京子。

車の来た気配に顔をあげる。クラクション、短く合図のように鳴る。水を止め、

京子「（手洗いの方へ）」もう来たわ、お父さん（といいながら勝手口へ手を拭きながら行き、ドアをあけて外に向って）御苦労さま、ちょっと待って下さい（といい、また手洗いの方へ）お父さん、車来たわ、もう（といいながら上る）」

●トイレの前

ワイシャツにネクタイの精一が、水音と共にトイレから不機嫌に出て来る。

●座敷

京子「（入って来ながら）」あ、腎臓の漢方薬、持ったかしら？（と筆筒へ行く）」

●ダイニングキッチンと居間

精一「(スボンのベルトを締めながら) 今度じゃないよ
(と居間へ)」

●座敷

京子「あら、ボブじゃなかった? あげるの」

●居間

精一「ボブさ。ボブはロスだよ。今度はホノルル、シスコ。
シスコ、ホノルル、ナリタじゃないか(と怒ったように
窓へ行きあける)」

京子「なに怒ってるの(と現われる)」

精一「亭主のスケジュールぐらい、おぼえとけよ(と背中
のまま庭を見ている)」

京子「(苦笑して) ちょっと、うっかりしたの(と座敷に
かかっているパイロットの制服の上衣をとって) 天気予
報あたらないけど(と微笑で居間へ)」

●居間

精一「(庭を見ている)」

京子「(来て) はい、お父さん(と上衣を着せるように持

つ)

7—午後の旅立ち

精一「(ふりかえらない)」

京子「どうしたの?」

精一「(動かない)」

京子「気分でも悪い?」

精一「いや。悪くない」

京子「(気がかりに) やだわ。飛ぶ前に(と精一の顔色を
見ようとする)」

精一「なんでもないよ(と目をそらすように上衣をとる)」

京子「具合悪かったら、行くのやめて」

精一「悪くないよ(上衣を着ながら玄関へ)」

京子「悪くなくても、なんか、いやな気がするなら、やめ
て(と続く)」

精一「そんな訳に行くか」

京子「だって、いつもとちがうわ」

精一「ちがうさ(といままでの暗い調子をふっきって
う)」

京子「なにが」

●玄関

精一「(来ながら上衣のボタンをとめ) 車が来たのは、ク
ラクションで分るんだ。何度も呼ぶんじゃない」

京子「やだ、そんなこと怒ってたの?」

精一「便秘してんだよ。行く前に出しちまおうと思ってる

「ああ、お父さん車、お父さん車って」

京子「(笑ってしまふ)」

精一「(自分も少しおかしくなって) 笑い事じゃないよ。」

空港や機内のトイレは、俺は駄目なんだよ。そんな事よく知ってるじゃないか」

京子「なら、出してらっしゃいよ。待って貰えばいいんだから」

精一「今さら出るかよ(と京子から帽子をとる)」

京子「出るわよ(と笑っている)」

精一「(苦笑して) ハワイで出すよ(とカバンをとってドアをあける。帽子はかぶらない)」

京子「(統いてサンダルをはきながら) お父さんの、下痢してるかと思えば、便秘なんだから(と出て行く)」

階段から、アメラグの仕度を入れたバッグをさげて慎一がおきて来て、玄関の外へは、まったく関心なくダイニングキッチンの方へ。

外で、ハイヤーに乗る精一を送る京子の「お願いします」「いってらっしゃい」などの声。車の発車音などが、次のシーンにかかって聞える。

●ダイニングキッチン

慎一は、なんでも荒っぽい。バッグをほうるように置いて、冷蔵庫から牛乳の紙パックを出し、コップをと

って注ぎ、のむ。

●玄関

京子「戻って来て、小さく独り言をいながらドアを閉め、ダイニングへ」えーと、ちょっと早いけど、新宿ならついでに(と慎一がいるのにギクリとして絶句するが、動きは止めず)」

●ダイニングキッチンと居間

京子「(居間の隅に置いてあるハンドバッグをとりに行きながら) 急にいるんだから」

慎一「今夜、泊って来るよ(と牛乳をしまふ)」

京子「何処へ？」

慎一「上野(と洗面所、風呂場へ行ってしまう)」

京子「(ハンドバッグを持ったまま) 上野？」

●洗面所

慎一「明日日本郷で試合があんだよ(と歯ブラシと歯みがきをとる)」

京子「上野の何処？(と来る)」

慎一「(旅行用の洗面具入れをとりながら) 友達の親戚」

京子「友達って？」

慎一「(歯ブラシなどを洗面具入れにいれながらダイニン

グヘ) いいじゃない」

京子「よかないわよ(と続く)」

●ダイニングキッチン

慎一「(バッグに洗面具入れを入れながら) 知らないんだよ。はじめて行くんだから」

京子「それじゃ困るの」

慎一「電話するよ、夜」

京子「縁起でもないから、いいたくないけど(ハンドバッグを食卓の上で開けて中をさがす)」

慎一「分ってるよ(とさえぎるようにいう)」

京子「お父さんが出てゐる時は、なにが起きるか分らないんだから」

慎一「電話する(と居間へ)」

京子「夜、いないの、お母さん」

慎一「いないって？」

京子「夕飯、短大の頃のお友達と食べるの」

慎一「お父さん、カミソリ持ってっちゃった？」

京子「あるでしょ、テレビの下に」

慎一「(気がついて電気カミソリをとり) 十時すぎにかけよ。十一時がいい？」

京子「そんなに遅くはないけど」

慎一「じゃ、十時(とバッグに電気カミソリをつっこむ)」

9—午後の旅立ち

京子「慎ちゃん」

慎一「うん？」

京子「すぐおりてくるなら、お父さんに、いってらっしゃいぐらいいいなさい」

慎一「分った(と洗面所の方へ)」

京子「(あとに続きながら) まるで避けてるみたいに出て行ったら、おりてくるんだから」

●洗面所

慎一「(髪の毛の癖に、水をつけて押さえながら) お父さん、制服、どうにかなんないのかね？」

京子「どうにかって？」

慎一「家から制服着ていかなかったっていいんでしょう」

京子「そりゃいいらしいけど」

慎一「さもパイロットだって、いわんばかりに、みっともないよ」

京子「慎ちゃん、昔は自慢だったのよ」

慎一「昔は昔さ(とダイニングへ)」

京子「お父さんが制服着て帽子かぶって出て行くの近所の人に見せたがったんだから」

●玄関

慎一「(バッグを持って来て) 子供はそうさ(とバッグを

ほうって靴をはく」

京子「本郷って、東大？」

慎一「東大？」

京子「ラグビーの相手」

慎一「東大なんかとやる訳ないよ」

京子「どうして？」

慎一「いいところはいいところ同士でやってんだよ。こっちは

三流の大学だからね。それなりの相手とやるわけ」

京子「ふうん」

慎一「行ってきます（ととび出して、ボタンと強く閉める）」

京子「静かに閉めなさい！（と外へ怒鳴る）」

●ハイヤーの中

精一「（やや暗い顔で外を見ている）」

運転手（飯沼）「機長」

精一「う？」

飯沼「今日はなんか沈んでますね」

精一「そうか？」

飯沼「いつも機長明るいから」

精一「（微笑し）そんなにいつも明るいかな？」

飯沼「ええ。そりゃあもう（と笑う）」

精一「因果な仕事でね」

飯沼「いえいえ（と軽く問の手）」

精一「とぶ前は、半分もう無意識に気分を明るくしなくちゃいけないと思っちゃまう」

飯沼「なるほど」

精一「たとえば、家内とちょっと、ぶち割った話をしようと思ってもね」

飯沼「ええ」

精一「こりゃあ揉めるなと思うと、やめちまうんだ」

飯沼「なるほど」

精一「喧嘩したままとびたくないと思っちゃまう」

飯沼「分りますねえ」

精一「そうかい」

飯沼「ジェット機と車を一緒にしちやあいけないけど」

精一「（同じようなもんさという感じで）いやあ」

飯沼「私なんかも、あとひくような喧嘩はさけちゃいますね」

精一「そう」

飯沼「仕事しながら鼻^かアめ畜生めなんて思ってた、あぶなくていけない」

精一「うむ」

飯沼「いや。本当に、そういうところあるなあ」

精一「そんな事じゃ、いけないんだろうが」

飯沼「ねえ」

精一「正面から、ぶつかるのを避けている。あたりさわりのないところで、いつてみりゃあ、よそよそしく暮している」

飯沼「しかしまあ、そんなもんなんじゃないですか？」
精一「うむ。そんなもんかねえ」

●矢島家・ダイニングキッチン

洗いものを続けている京子。

●永田町・官庁街（昼）

●そのあたりの喫茶店・店内

空いている。

その一画に向き合っている誠と野口里子。

誠「（経緯を話したところでテーブルに肘をつき、指先で額をささえて目を伏せている）」

里子「（やさしさも甘さもあるが、割り切りのいい頭脳を持ち、自信もある）そう。あなたらしいと思う（と微笑）」

誠「――」

里子「で、なにをして貰いたい？」

誠「う？（見る）」

里子「励まして貰いたい？ 慰めて貰いたい？」

誠「（苦笑）」

里子「どっちにしても、あなたの味方よ。週刊誌については、まったくの素人だけど、あつかましけりゃあ有能だなんて、私も思えないわ」

誠「ありがたいけど、味方は君だけだ」

里子「いいじゃない。やめちゃいなさい」

誠「（目を伏せていて）やめて、どうする？」

里子「考えるの。時間かけて、いい仕事さがすの、多少なら、お金貸せるわ」

誠「きっと、それが冷静な判断で奴だらうけど（間あって）やめたくないんだ」

里子「仕事が好き？」

誠「好きで、嫌いだ。時々、週刊誌なんて大嫌いだと思うこともある。毎週々々、別の出来事おっかけて、次の週には忘れちまってる。上っ面ばかりだ。もうちょっと調べたいと思っただって、そんな時間はありゃあしない。そのくせ、あつかましい。写真のことだってね。とことんあの事故につき合う気なら、あつかましくったっていいんだ。多少の邪魔をしたって撮りゃあいい。しかし、実際は一週間だよ。来週には、もうとりあげやしない。怪我をした人にも、死んだ人にも、なんの感情も持たな

いんだ。ただ、誌面うめるために、あんなに、あつかましいっていうのは、たまらない気がしたんだ。半分自己嫌悪で、あんなことしちまったんだ」

里子「でも、好き？」

誠「事件を追っかけて、表面と、段々ちがう面が見えて来たりするのは、好きだね」

里子「(うなずく)」

誠「押しが足りないっていうのが、みんなの、ぼくに対する評価だ。たしかに、ぼくには気の弱いところがある。

しかし、それだけじゃない。負け惜しみに聞えるだろうけど、ぼくにはぼくのやり方がある」

里子「(うなずく)」

誠「ぼくは、出来るだけ相手の身になろうとしている。そうすりゃあ、あんまりバカな事は聞けない。映画の宣伝に來たアメリカの女優に、日本の男性は、どう思うなんて聞けるかい？ 内心どう思ったって、悪いっていいっこない。それでも聞けって編集者はいうんだ。お世辞と決まってるって、そういう質問の返事を読者は聞きたがっているという。そうかね？ ぼくは、はずかしくて、そんな質問はしたくない」

里子「その通りだわ」

誠「事故で父親亡くして、死体にとりすがって泣いている娘に、どんな気持か、聞け、という。悲しいっていう。

どう悲しいか？ お父さんは、どういう人だったか？

事故について、どう思うか？ 二度とおこして欲しくないと思うか？ そんなことを、しつこく聞くのが有能なら有能になんかなりたくない」

里子「(うなずく)」

誠「そんな質問で、いくら押しが強かったって、なにかを取材したなんていえるかね？ 相手の実際の姿を、本気でつかもうなんて気はないんだ」

里子「場があればいいのね。あなたが思うように書ける場が」

誠「そうともいえない」

里子「？」

誠「まだ、ぼくには訓練が必要だ。その訓練は、取材記者をやりながら、して行きたい。だから、いまの仕事をやめたくないんだ」

里子「(うなずく)」

誠「つまらない、愚痴をいったよ」

里子「ううん」

誠「仕事中、悪かった」

里子「いいけど、その社、駄目になって、どうするの？」

誠「頼んで歩くよ」

里子「そう」

誠「そして、せめて、どっかの社が使ってくれる程度に、

あつかましくなる（と微笑）」

里子「（微笑し）私に声かけた時は、結構あつかましかったけど」

誠「（微笑笑）」

●ある会場

外国人も多く集まっている。

●同時通訳のブース

三人ほどの人と一緒に、その中でヘッドホーンをして働いている里子。

誠の声「野口里子は、ぼくが外務省で声をかけて、つき合うようになった女性だった。数年アメリカに留学した経験があり、同時通訳が仕事だった」

里子「そうです。その通りだと思います。いま、多様なアメリカ諸国に共通した問題があるとすれば、それは、ヨーロッパについての」

ジェット機の轟音先行して。

●成田空港（夕方）

ジェット機が、ゆっくり機首をめがらせている。

13——午後の旅立ち

●そのコックピット

精一、副操縦士、セカンドオフィサーの三人。

緊張し、働く男の姿。

管制官と精一のやりとり。

●新宿西口のビルの夜景

●ホテル・ロビー

白人の男女が、数人でしゃべりながら、一方へ行く。入れ違いに、京子来て、ロビーを人をさがす目で見回す。

一度見た方向をもう一度見て、あ、となる。

はなれて、高見美保が、柱の傍に立って微笑している。

柱のかげにいた印象。

二人の間を礼服を着た男や女が横切って行く。

京子「（小さく）美保さん——」

美保「（微笑で古風でなくお辞儀）」

京子「（ツカッカと行き）しばらく」

美保「（目を合せず、クスッと笑って下を向き、俯いたまま）かくれてたの」

京子「かくれて？」

美保「あなたが、あそこ（玄關）、入って来るの見たら、

急に逢うのが、嫌になったの（まだ目を合せない）」

京子「どうして？」

美保「年とっちゃったもの」

京子「お互いさま」

美保「ううん。あなた、とても綺麗」

京子「ううん。遠くだけ。よく見て（と苦笑）」

美保「私も遠くなら、まだいいかな？（とここまで近づいて来てからの京子とは目を合せず、サッサと十歩ほどはなれ京子を振りかえり）どう？（京子に聞えなくていい）」

京子「（微笑して）キレイ（と美保には聞えなくていい。口の形で分らせるようにいう）」

美保「フフ（と今度は京子を見たまま近づき）十七年ぶりよ。信じられる？」

京子「ほんと」

美保「同じ東京にいて、それぞれ奥さんになって、穴ぐらにいたわけ」

京子「しゃべり方、かわらない」

二人、笑ってしまう。

●小さなレストラン

テーブルを寄せて結婚披露宴帰りの若い男女六人ほど

が、みんなワイングラスを持って、笑っている。
騒々しい、というほどではない。

青年A「じゃ、残り者の俺たちも、村田に負けないで、よ

ッき生涯の伴侶を一日も早く見つけることを誓って」

女性A「乾杯」

「乾杯」と口々にいって、のむ六人。

はなれた窓際の席に、美保と京子が、ワインと料理を前にして食べている。

美保「（男女の方は見ないで）失敗したわ（と小さくいう）」

京子「え？」

美保「おいしいお店だから、お連れしたけど、あまり高くないから、ああいうのが来るのね」

京子「いいわよ。それほどうるさくないし」

美保「そうかしら。私、ああいうの大嫌い。若い奴、大嫌いい」

京子「（苦笑）」

美保「自分の息子を含めて、ガサツで、荒っぽくて、自分勝手で、時々ひっぱたいてやりたくなっちゃう」

京子「息子さん、おいくつ？」

美保「十九、ひとりっ子」

京子「うちと同じ」

美保「でも、うちのは駄目なの。頭わるくて、最低の大学